

令和3年度千葉県立博物館文化セミナー

令和3年度 千葉学講座 要旨集

●日時：令和4年（2022年）3月6日 13：00～16：00

●場所：千葉県立中央博物館

●プログラム

13：00 開始のあいさつ

13：05～ 講演1「房総半島の多様な海鳥」 1
中央博物館 研究員 平田和彦

13：35～ 講演2「千葉県における地衣類相調査」 2
中央博物館 研究員 坂田歩美

14：05～ 講演3「干鰯の歴史と房総の繁栄」 3
関宿城博物館 主任上席研究員 榎美香

(休憩 15分)

14：50～ 講演4 4～5
「漆芸家、佐治賢使の作品におけるデザインと技法について」
千葉県立美術館 上席研究員 相川順子

15：20～ 講演5「千葉県の土壌動物」 6～8
中央博物館 自然誌・歴史研究部長 萩野康則

15：50 終了のあいさつ

●事業主体 千葉県立美術館／中央博物館・大利根分館・大多喜城分館・分館
海の博物館／現代産業科学館／関宿城博物館／房総のむら（指
定管理者〔公財〕千葉県教育振興財団）

房総半島の多様な海鳥

千葉県立中央博物館 研究員 平田和彦

千葉県の海岸延長 531.1km は全国 25 位と、海のない 14 県を除けば下位であるにもかかわらず、千葉県に対して海のイメージを抱く人は数多くいます。これは、豊かな水産物や盛んなマリンレジャー、貝塚や捕鯨などの史跡や文化、海岸部の港湾や工業地帯など、海とかかわりの深い産業や歴史によるところが大きいと思われまふ。これらの海とかかわる多様な産業や歴史は、海に突き出た半島という千葉県ならではの地理的特性によって発展し、紡がれてきました。

千葉県の海らしさは、海鳥（本講座では、海岸や外洋に生息する鳥類を「海鳥」とします）からも感じるすることができます。海鳥は行動圏が広く、季節や年ごとに海が多様な環境をうまく使い分けながら暮らしています。海洋生態系の食物連鎖の頂点に位置し、海域の環境や生態系の特徴をよく表します。そんな海鳥は、個体数が多く、海面より上で暮らす海洋生物であり、肉眼で観察できる大きさである点で、私たち人間にとって身近でよく目立ち、各地の海の特徴を様々な角度から伝えてくれる存在なのです。

本講演では、千葉県に生息する海鳥の多様性について、それを支える房総半島の多様な沿岸環境に着目しながら4つのエリアに分けて紹介します。例えば、利根川が太平洋にそそぐ銚子半島では、沖合の漁場や水揚げ日本一を誇る銚子漁港で多くのカモメ類が越冬します。太平洋に突き出た地形のため、ミツユビカモメなど外洋性の海鳥もしばしば陸から観察できます。長さ 60km 以上にも及ぶ砂浜海岸である九十九里浜では、波打ち際にはシギ・チドリ類、遠浅の沖には貝などを食べる潜水性のカモ類が生息します。岩がちな海岸が広がる安房地方では、岩礁を好むクロサギや天敵を寄せ付けない断崖でねぐらをとるウミウなどが見られます。また海岸線の漁港の密度が高く、カモメ類やサギ類がおこぼれをねらって集まります。開発が進んだ東京湾内にも、貴重な海鳥の生息環境が残されています。点在する干潟はシギ・チドリ類などの渡り鳥の中継地となっているほか、一部の埋立地では絶滅危惧種のコアジサシが繁殖しています。

海鳥がそこに生息する理由を考えると、その背景にある環境を生み出した地球の歴史や漁業などの人間活動とのかかわりが見えてきます。房総半島の多様な海鳥を通じて、千葉県の海の魅力を探りましょう。

千葉県における地衣類相調査

千葉県立中央博物館 研究員 坂田 歩美

地衣類は菌類と藻類が共生関係を結んだ複合生物で、体の中を観察すると、菌類と藻類が見られます。菌類は藻類に水やミネラルなどを提供し、一方、藻類は光合成産物である糖アルコールを菌類に与え、共生しています。千葉県では300種以上、日本では約1700種が知られ、種類によっては街路樹の上や道端のコンクリートの上など身近な場所で見ることができます。また、地衣類が付いた松や梅は苔松苔梅と呼ばれ、珍重されたり、日本画に描かれる苔のモデルも地衣類だとされています。本講演では身近にあるのに知られていない地衣類がどのような生き物なのか紹介すると共に、これまでの県内における地衣類相調査の状況、分布を明らかにするために行っている「分布調査」、ウメノキゴケ科の種ごとの県内の分布について紹介します。

当館では、千葉県に生育する地衣類のリストを完成させるため、1989年の開館以来、県内各地で地衣類相調査を実施してきました。20年以上経過した頃、出現種がおおよそ把握できたと考えられました。そこで、種ごとの分布状況を把握するために、2012年に、千葉県生物多様性センターが運用する「生物多様性地理情報システム」を用いて、当館に収蔵された標本の採集地点を3次メッシュ単位で地図上に表示しました。その結果、採集地点に偏りがあることが明らかになりました。さらに、種ごとの分布図を見ると、ごく普通に出現する種の標本の採集地点数が出現頻度の割に少ない傾向を示す一方で、出現頻度がまれな種ほど出現頻度の割には採集されていました。県内における分布状況を正しく評価できるような調査を実施していく必要があることが確認されました。そこで、直径50m程度を1調査地点とし、出現する大型地衣の全種を採集する調査を実施しました。県全体を網羅するため、2次メッシュに1調査地点を設けるよう努め、調査地点が少ない地域で積極的に調査を実施しました。これらの採集地点を地図上に表示させたところ、2012年に比べて、県内各地を調査されていることが示されました。更に、ウメノキゴケ科30種を種ごとに、分布図を作成しました。その結果、実際の出現頻度と分布が概ね一致し、種ごとに分布状況が異なることが明らかになりました。

ほしか 干鰯の歴史と房総の繁栄

千葉県立関宿城博物館 主任上席研究員 榎 美香

本講演では江戸・明治期の房総が、^{いわし}鰯のおかげでいかに繁栄したか、というお話しをしたいと思います。食べ物としては安い魚ですが、明治の末頃に化成肥料が製造され始めるまでは、最高級の肥料として取引されていました。房総はその日本一の産地でした。

千葉県立中央博物館で所蔵している『日本博覧図』は、明治中期の豪商・豪農・名士達の屋敷地等の様子を銅板画で描いたものです。このうち^{ほしか}干鰯・^{しめかす}粕の網元や生産問屋が千葉県北部では215件中7件、南部では192件中22件を占めています。千葉県には鰯長者がたくさんいたことが分かります。この版画をよく見ると、当時の作業の様子なども読み取ることが出来ます。

同じ房総でも、地域・地形によって、獲れる鰯の大きさ、漁法、加工法も異なりました。九十九里の遠浅の砂浜では、^{おおじびきあみ}大地引網で小さめの^{こばいわし}小羽鰯が大量に獲れました。獲れたそばから砂上にまいて天日干しするのですが、小さいので熊手で何度か天地返しすれば数日で乾燥します。

一方、銚子や夷隅、東京湾などの磯がちな深い海では^{はちだあみ}八手網と呼ばれる漁法で大きめの^{おおばいわし}大羽鰯を獲りました。しかし中まで乾燥する前に腐ってしまうため、すぐにゆでて絞り固める粕に加工するほうが多かったそうです。高く売れるうえ、同時に灯油となる魚油も絞れます。

干鰯は、戦国時代に関西で広まった木綿の栽培が盛んになるにつれ、肥料としての効能が注目され、17世紀には急速に西日本で需要が高まりました。『関東鰯網来由記』など文献によれば、17世紀初頭前後から紀州・摂州・泉州などの漁民が鰯を求めて房総にやってきて大がかりな鰯網漁を始め、干鰯にして西国に送るようになったそうです。干鰯は最初、浦賀に集積され、多くの干鰯問屋で繁盛しました。そのうち銚子の荷主達が資本を出して江戸に干鰯の揚場を設けたことで、深川もこれに対抗する一大集積場となりました。そして更に、関東内陸部でも干鰯の需要が高まってくると、今度は利根川舟運の要、関宿の問屋に荷を取られてしまうようになります。

網元、加工業者、荷主問屋、集積地の干鰯問屋、在地問屋、農村地主達の思惑と攻防。昭和初期頃まで鰯の経済が、房総の海と川を大いににぎわわせたのです。

漆芸家、^{さじただし}佐治賢使の作品におけるデザインと技法について

千葉県立美術館 上席研究員 相川順子

市川市を拠点に活躍した漆芸家、佐治賢使【大正3（1914）年－平成11（1999）年】は、突出したデザインの才能と漆の美を融合させることで、斬新でモダンな作品を発表し続け、その優れた業績により文化勲章を受章した、戦後日本を代表する漆芸家です。

絵画のような色調の変化を見せる色漆、金銀鉛などによる蒔絵、七色に煌めく貝の螺鈿、鳥の卵殻、顔料や金属をつぶした平目の粒子、乾漆粉、べっ甲、真珠など、材質や技法の多様さも、佐治の作品を一層魅力的にしています。

この講演では、佐治の活動を時代順に5部に分け、各時代における主な活動と、その時代の作品の特徴や魅力について紹介します。

1 岐阜県多治見市生まれ

佐治が生まれ育った環境と、上京して東京美術学校入学するまでを紹介します。

2 東京美術学校時代

東京美術学校時代に、デザイン公募への応募や、首席となった卒業制作について紹介します。

3 金沢時代

卒業後、金沢に移住して石川県立工業学校教諭となり、やがて制作に没頭する様子や、新文展、日展で特選を連続受賞した作品を中心に、初期の作品に認められる、佐治の高いデザイン力と技術について紹介します。

4 東京時代

金沢を引き上げ、東京で活動していた頃の主な活動を紹介します。

5 千葉での本格的な制作活動

昭和 29 (1954) 年 40 歳の年に千葉県市川市国府台に移り住み、没するまで 45 年間をこの地を拠点に活動。この時期に制作した作品を、以下の 5 つの区分により紹介します。

- ① 幾何学的な形を配した屏風や衝立、棚の作品。
- ② 虫たちの密やかな生態が繰り広げる小宇宙を表現した作品。
- ③ 夜景を主題とした幻想的な作品や、昼間の風景作品。
- ④ いろいろな鳥をモチーフとした作品。
- ⑤ 植物と昆虫が織りなす神秘的な情景を描いたお盆。



《晨明》昭和 51 (1976) 年



《新宿駅東口モザイク壁画》昭和 39 (1964) 年



《爽》昭和 55 (1980) 年

千葉県の土壌動物

千葉県立中央博物館 自然誌・歴史研究部長 萩野康則

1 土壌動物のあらまし

土の中で生活している動物を「土壌動物」と呼びます。土の中には土壌動物の他にも、植物、カビやキノコなどの菌類、バクテリア等もいます。

大部分の土壌動物は「落葉を細かくする」（落葉を食べて細かくすることで、カビやバクテリアによる分解が速く進みます）ことと「土を耕す」（土の中を動き回ることによって土をかき混ぜ、すき間を作り、空気がよく通り、水はけ・水もちのよい土を作ります）ことに関与しています。彼らのおかげで豊かな土が育まれているのです。

暗黒のわずかな隙間で生活するため、からだの特徴に狭い空間への適応（からだ小さくなる、細くなる、平たくなる、脚が短くなるなど）や暗やみへの適応（眼や色素が無くなるなど）が見られます。

体長や生息環境によって、肉眼でピンセットや吸虫管を用いる、乾燥を利用して土の中から追い出す、水びたしにして土の中から追い出す、といった方法で採集します。

一般に森林土壌1平方メートル中にダニ5万匹、トビムシ5万匹がいるといわれています。もしあなたがちょっとした林の中にはいれば、その足の下には数千匹の土壌動物がいるのです。

2 代表的なグループの紹介

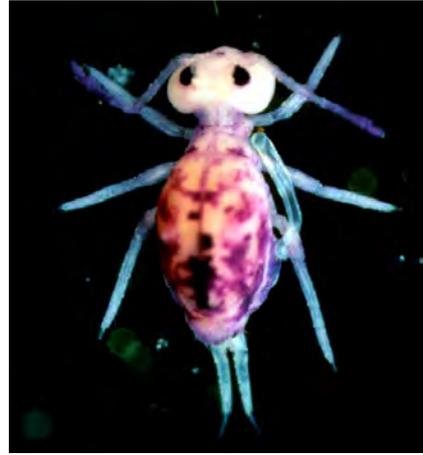
ダニは嫌われものの代名詞ともいえる存在ですが、実際には大部分のダニは何の害ももたらしません。特にササラダニ類は落ち葉をせっせと食べて細かくする「森の掃除屋さん」です。ササラダニ類は種数・個体数ともに極めて多く、トビムシ類とともに土壌動物中、最も重要な群といえます。



ササラダニ類。背景の方眼は1mm.

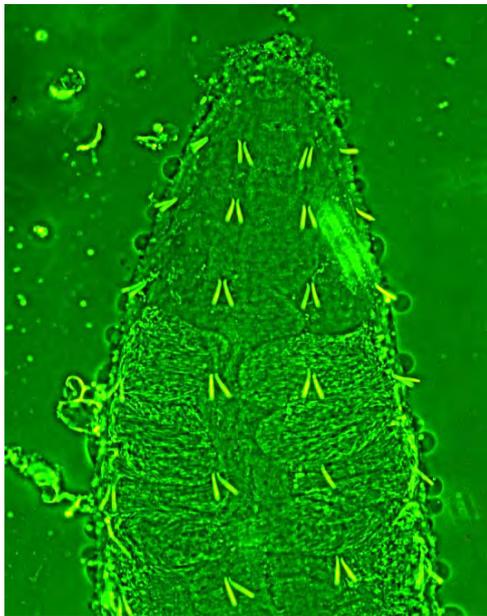


フシトビムシ類. 背景の方眼は 1mm.



コシジマルトビムシ. 体長 1.5mm.

トビムシはササラダニ類とともに種類数が大変多く、土壌動物として最も一般的かつ重要なグループのひとつです。ほとんどのものが落ち葉や菌類を食べていると考えられています。多くのものが腹部に「跳躍器」と呼ばれる器官を持っており、これで地面をたたいてピョンとはねます。



ミミズ体表の剛毛.

ミミズは土壌を耕し、かき混ぜてくれる、非常に重要なグループです。日本で最大のミミズは体を伸ばしたときでも 50cm 程度ですが、外国には 2m にもなるものがあるそうです。一見ただヌルヌルしているようにしか見えない体表に、ごく短い毛が、規則正しく生えています。

クマムシは体長が 1mm にも満たない微小な動物で、生体を観察すると 4 対の脚でのろのろと動く様子がクマに似ているのでこの名があります。休眠状態下では乾燥や高温、低温に耐える、世界一タフな虫として近年知名度が上がっています。

ダンゴムシはおそらく子どもたちに最も身近なムシの代表格でしょう。市街地でもごく普通に見られるのはオカダンゴムシという種類で、明治時代にヨーロッパから入ってきた外来種です。



トラフババヤスデ。体長約 3.5cm。
千葉県から新種として記載された。

ヤスデは、ムカデ同様たくさんの脚があるので嫌われますが、生きた動物を捕えて食べるムカデと違い、落ち葉を食べる性質のおとなしいムシです。ムカデ類は体の各節から1対の脚が生えているのに対し、ヤスデ類は各節から2対の脚が生えています。

ムカデはおどろおどろしい外観と毒牙を持つことから、土壤

動物の中では嫌われものの代表格ですが、オオムカデ類の雌は産卵すると、卵がかえるまで何も食べずに卵を抱いて世話をし、外敵やカビから守るといった意外な面も持っています。

3 千葉県の土壤動物

演者が専門に扱っているエダヒゲムシ類はこれまでに日本から28種が記録されています。千葉県からは19種が記録されていて、そのうちの2種は千葉県産の標本に基づいて新種記載されたものです。



(左) イシイカワリモロタマエダヒゲムシ。体長0.9mm。
(右) サンゴホンエダヒゲムシ。体長0.5mm。
両種とも現在のところ千葉県でのみ確認されている。

千葉県の土壤動物相は実はあまり解明が進んでいません。2016年に作成した千葉県産土壤動物全種リスト（昆虫除く）に採録されているのは742種ですが、実際にはこの何十・何百倍もの種が生息しているものと思われます。

現在10種の土壤動物が千葉県からのみ確認されています。ただし、今後の調査で千葉県外から報告される可能性もあります。

近い将来、ヤンバルトサカヤスデとマダラコウラナメクジという外来性の土壤動物が、千葉県内で確認されるかもしれません。